

ケニア研修を終えて

PO：菅野哲也

昨年10月1日から新しい技術協力プロジェクト、「ケニア少年保護関連職員能力向上プロジェクト」が始まりました。アジ研-JICA-ケニア政府が力を出し合って、少年保護に関係する職員の職務遂行能力を向上させるという目標が掲げられていますが、そのように順調に物事が運ぶのかどうか担当としては不安を感じるどころです。

今回のケニア研修（「第10回ケニア非行少年処遇制度研修」）では、この新プロジェクトに直接的にかかわる12人を選考し、職員研修制度の素案作りとカリキュラム・マニュアル作成を課題として設定しました。研修開始前後は、ここでがんばって成果を上げておかないと今後の業務に支障が出てしまうという焦りと、「成果、成果！」と自分や研修参加者にプレッシャーをかけることへの疑問の間で気持ちは揺れていたのですが、どうも「案ずるより産むが易し」という結果になったようです。

従来からケニア研修はまよりの良い研修と言われていますが、今回の研修参加者においては、「食欲」で「意欲的」という表現を加えても良いようです。遅くまで図書室に居残って専門知識をかき集め、どの講義でも疑問をそのままにせず納得するまで質問をして追及し、ディスカッションでは白熱した議論を展開し、こちらの心配を吹き飛ばすかのような勢いでプログラムに参加し、自由時間まで潰して課題に取り組んでいました。児童自立支援施設や矯正施設、あるいは裁判所その他の研修施設を見学しましたが、どこでも熱心に質問するために時間が足りなくなってしまう、帰庁が遅れたり食事時間に食い込んでしまったりしていました。夕方の5時には大方の職員が居なくなってしまうケニアでは考えられないことです。

研修参加者のリーダーであるオゴチ児童局次長が今回のケニア研修について、「貴重で有益な知識と経験を得ることができた」と述べながらも「まだまだやるべきことは残っている」と総括していました。達成感と次のステップへの不安がない交ぜになっているといったところでしょうが、研修参加者が基本的に共有している「職員のレベル向上を急がなければならない」という危機感を代弁していると思いました。風土も文化も異なる国民同士が、同じプロジェクトに参加したことで、「不安や責任」あるいは「充実感や達成感」を共有できたことも、今回の研修の一つの成果なのでしょう。